火山 第59巻 (2014)
第4号 347-348頁

追　悼

一色直記さんのご逝去を悼む

写真 1.　青ヶ島帰りの八丈島千畳敷にて（1995年3月）

日本火山学会会員, 一色直記さんは2014年9月14日, つくば市内の病院にてご逝去されました．享年85歳でした．ここに謹んで哀悼の意を捧げます．火山学会においては1958年から1990年まで途切れることなく，幹事あるいは委員，評議員を務めておりました．

一色さんは1929年生まれ，旧制浦和高等学校を経て，東京大学理学部地質学教室を1952年に卒業されました．久野久先生指導の卒論は，群馬県の裏妙義山付近の火山岩がテーマだったとうかがっております．卒業後は助手を経て, 1956年に工業技術院地質調査所（当時は川崎市．現在の産総研地質調査総合センター）に入所，以後1990年に定年退職するまで地質調査所に在籍していました．入所以来の所属は地質部でしたが，最後の1年半は地質標本館に籍を置いていました．

一色さんは，伊豆諸島の火山岩の研究が生涯を通じたテーマでした．入所前にすでに青ヶ島に関する研究を発表しています．入所後に最初に出版した地質図は八丈島でしたが，現地調査の大部分は入所前に行ったものでした．久野先生の指導だったのか，おそらく卒業とともに伊豆諸島の火山岩に重きを置く研究方針だったのでしょう．八丈島に引き続き，退職までに三宅島，利島，御蔵島，神津島，伊豆大島，新島（出版順）の5万分の1地質図幅をすべて単著で作成しました．これらの5万分の1地質図作成業務は独法化後の現在でも引き続いている一連の事業です．そのほか，伊豆鳥島や小笠原諸島の硫黄島の地質図も作成しており，間違いなく伊豆・小笠原諸島の火山に最も精通した研究者でした．また，伊豆大島，八丈島や新島などでは，長年にわたり人類学者や考古学者との共同研究も行っていました．もちろん，伊豆諸島の火山研究だけに専念していたわけではありません．1965-66年にはアメリカ地質調査所，ハワイ大学さらにカリフォルニア大学への国費留学をしました．国内他地域では北海道，東北，山陰地方のいくつかの地質図作成にも分担参加していました．また，1982年発行の1/500万の日本地質図（第4版）の作成にも深く関わっていました．この縮尺は教科書にも使えるサイズで，地質図の普及目的を強く考えていたようです．

火山噴火に限れば，焼岳の1962年噴火では噴火直後に調査に出かけています．これをまとめた記事では新聞社の空撮写真が使われていますが，一色さんのお父様が新聞記者で，それがお名前に使われている「記」の由来だ, とうかがった記憶があります．この記事の最後を「現在までのところ　いくつかの特定の火山については　ある程度の噴火予知が可能になってきている．しかしそれはあくまでも経験則にすぎない．噴火予知の基本となる噴火現象の機巧そのものの解明のために　火山学者はまだまだ　けわしい道を歩まなければならないであろう.」と結んでいます（地質ニュース，no. 97）．それから50年以上経ちましたが，この状況はどこまで変わったのでしょうか．

1983年の三宅島，1986年の伊豆大島の噴火後は，すぐに一色さんのまとめられた地質図や噴火記録が参照されました．しかし，一色さん自らは表に出ることを極端に嫌っていました．三宅島1962年，秋田駒ヶ岳1970年の噴火の際も現地調査に出かけています．三宅島に関してはこの噴火前に実際に現地調査を行っていた数少ない研究者でした．私が一色さんから譲り受けた三宅島1962年噴火の資料中に当時の文書や手書きメモが挟まっており，その時の様子が少しうかがえます．海況が悪く一色さん自身は予定より2日遅れの現地入り，それに引き続き，総理府中央防災会議からの依頼で，諏訪彰さん，水上武さん，森本良平さんらとともに計5名の調査団として派遣されたと記してあります．

退職直前の1989年秋，火山学会で神津島に関する発表をしています．これが最後の学会出席だったかもしれません．かといって退職以降，自宅に引きこもっておられたわけではありません．ほとんど毎日のように徒歩で地質調査所（産総研）の図書室に来ていました．一色さんらしく，びしっとした姿で，建物玄関と図書室で毎回

受付記名をしていました．大変だからぜひ名札を（何らかの身分で），との申し出をかたくなに拒否していました．

一色さんは現役時代，火成岩と造岩鉱物の標準薄片セットを作成しています．これは現在でも引き継がれ，後輩たちの勉強用として利用されています．これは，指導教官だった久野先生が地質調査所用に作成した「伊豆箱根標準薄片」を拡張したものだったかもしれません．久野先生が自筆で作成し，それに一色さんが加筆した薄片リストが残されています．機器分析が主流となった現在でも岩石の肉眼鑑定・顕微鏡観察は基本中の基本であることは言うまでもありません．一色さんは体が不自由になる 5，6 年前までは，恩師だった久野先生の命日にはほぼ毎年，浅草まで墓参していたそうです．

在職中にご自身で採取された岩石試料は，将来の研究の役に立つよう，薄片とともに地質標本館に登録・収蔵されています．1980 年前後の微量元素や同位体組成などの研究では，一色さん採取試料はかなり活躍していました．登録標本の中に西之島の岩石試料があることに気がついたのは，つい 9 月になってからのことでした．試料番号から一色さんが 1974 年 7 月に現地に行かれたと推測できるのですが，西之島に行った話はまったく伺ったことがありませんでした．ご本人に直接お話しを聞かなければ，と思っていた矢先に訃報に接してしまいました．

一色さんは大変律儀で几帳面な方で，いつでもメモを取り，整理整頓をきちんとしていました．また，物事に妥協せず，頑固な方で，普段は余計なことはしゃべらず，あまり個人的なお話しをうかがったことはありません．わからないことはわからない，また，いやなことはいやだと曖昧にせずにはっきりと断る方でした．意を持って役職には就かなかった方です．また，現役の産総研職員でも図書室で作業中の一色さんの姿を見かけたという者はたくさんいるのですが，なかなか声をかけにくかった存在だったようです．私はというと，1986 年の伊豆大島噴火以降（この頃は，一色さんより若い小野晃司さんや曽屋龍典さんが地調の火山研究の中心にいました），いろいろと直接のご指導を受けることができました．伊豆大島では，私が 1986 年噴出物を案内する，一色さんはそれ以前の噴出物を案内する，という目的でした．それ以降，私にとって一色さんはごく身近な存在となり，気楽に声をかけられるようになりました．その後も退職後の 1996 年まで約 10 回，一色さんに案内していただいて（お元気なうちに，とお願いして），私も多くの伊豆の島々を見て回ることができました．もしかしたら私は，一色さんと一緒にフィールドを歩いた数少ない幸運な 1 人だったかと思います．一緒にサンプリングに出かけたまま，手つかずになっている岩石試料や未公表データがまだたくさんあります．早くどうにかしろと一色さんから急かされたことは一度もありませんでしたが，少なくとも後年のために活用できる形にしなければ一色さんに怒られてしまいます．

あれだけ頻繁に伊豆の島々に出かけていた一色さんですが，案外，船には弱かったようです．青ヶ島から八丈島へ戻る船中で具合が悪くなったことがあり，声をかけると「いや，ぼくは船には弱いんだよ」とにこにこと笑い返されました．

1968 年，一色さんが中心となって 1/200 万縮尺の火山図「日本の火山」が作成されました．これはごく最近，私が中心となって第 3 版として改訂しましたが，これも一色さんと私の何かのご縁だったかもしれません．生前のご厚意に感謝するとともに，改めてご冥福をお祈り申し上げます．

（中野　俊）